



渕水だより

No. 12

師匠の気持ち

1月末、子供たちが家庭でタブレットを使い、インターネットを通じて、学校から配信された課題に挑戦する取組を行いました。多くの子供たちが無事、課題を確認し、提出することができたようです。この取組は「GIGA スクール構想」実現に向けた環境整備の一環です。同時に、子供たちが一定期間学校に通えない事態に対応するための一つの手段となることも期待しています。保護者の皆様のご理解とご協力に感謝いたします。

「GIGA スクール構想」とは、2019年12月、文部科学省が打ち出した「子供1人に1台の学習者用PCと高速ネットワーク環境等を整備する5年間の計画」のことです。現在、あらゆる場所でICT機器の活用が日常のものとなっていますが、子供たちが大人になるころの世界は更に進歩し「インターネットと繋がったモノ（IoT）や人工知能（AI）などの最新テクノロジーが活用する便利な社会」と予想されています。この未来を生きる子供にはPC端末を鉛筆やノートと同じ単なる文房具として適切で安全に使いこなす力が必要になります。自分らしく、たくましく社会を生き抜く子供の力を育て、可能性を広げるための一つの手段が「GIGA スクール構想」に基づくICT環境の整備と教育の充実です。

文房具の変革は、明治時代にもありました。新しい国づくりが始まり、国はヨーロッパやアメリカの仕組みを勉強し、よい物、進んだ物を積極的に取り入れ、全ての子供が平等に学ぶ教育の仕組みをつくりました。しかし、筆算を学ぶ時など、新しい教育を行うには、それまで主に使っていた筆では不便なことが増え、新しい教育に合う、新しい文房具が必要になりました。そこで必要とされたのが鉛筆です。当時の日本には鉛筆を安く大量に用意する技術がなく、子供たちが国産の鉛筆を使えるようになったのは、1887年に工場がつくられてからだそうです。時代が求める社会の変化に合った教育を進めていくために、新しい文房具が必要になっていったという点では、明治も令和も同じです。



明治初期の小学校整備は、既存の教育施設である寺子屋も活用されたようです。当時の寺子屋の師匠（教師）は、筆から鉛筆への変革に戸惑ったと思います。高級品だった鉛筆の扱いを知っている師匠はさほど多くはなかったと思うからです。

私は寺子屋の師匠の気持ちが何となくわかります。私は、普段の生活ですら急速な進化を遂げるICT機器の扱いに四苦八苦しています。鉛筆を使ったことのない師匠と同じで、文房具としてICT機器を活用した教育に関する知識や経験はほとんどありません。それでも「筆でよいのに…」と思う気持ちを抑えて鉛筆を使う学びを進めた師匠のように、ICT機器をどう使えば子供たちのためになるのかを探る取組を進めていくことが大事なのだと思います。

日本でのICT機器は主に娯楽で活用され、学習での活用は世界に比べ遅れをとっていると言われます。現在、生活のあらゆる部分が世界とつながっています。未来はもっと複雑に密に関わるようになるでしょう。その社会で生きる子供には文房具としてのICT機器は明治の鉛筆と同じように欠かせないものになっているはずです。明治の師匠が未来の子供のために新しい文房具を受け入れ、工夫と努力を重ねたように、令和の私たち大人も挑戦していく時期が訪れているのだと思います。為せば成る、とにかく挑戦です。

保護者、地域の皆様の応援は学校の何よりの励みです。これからも、温かいご理解とご協力をよろしくお願いします。

尾崎 斉